

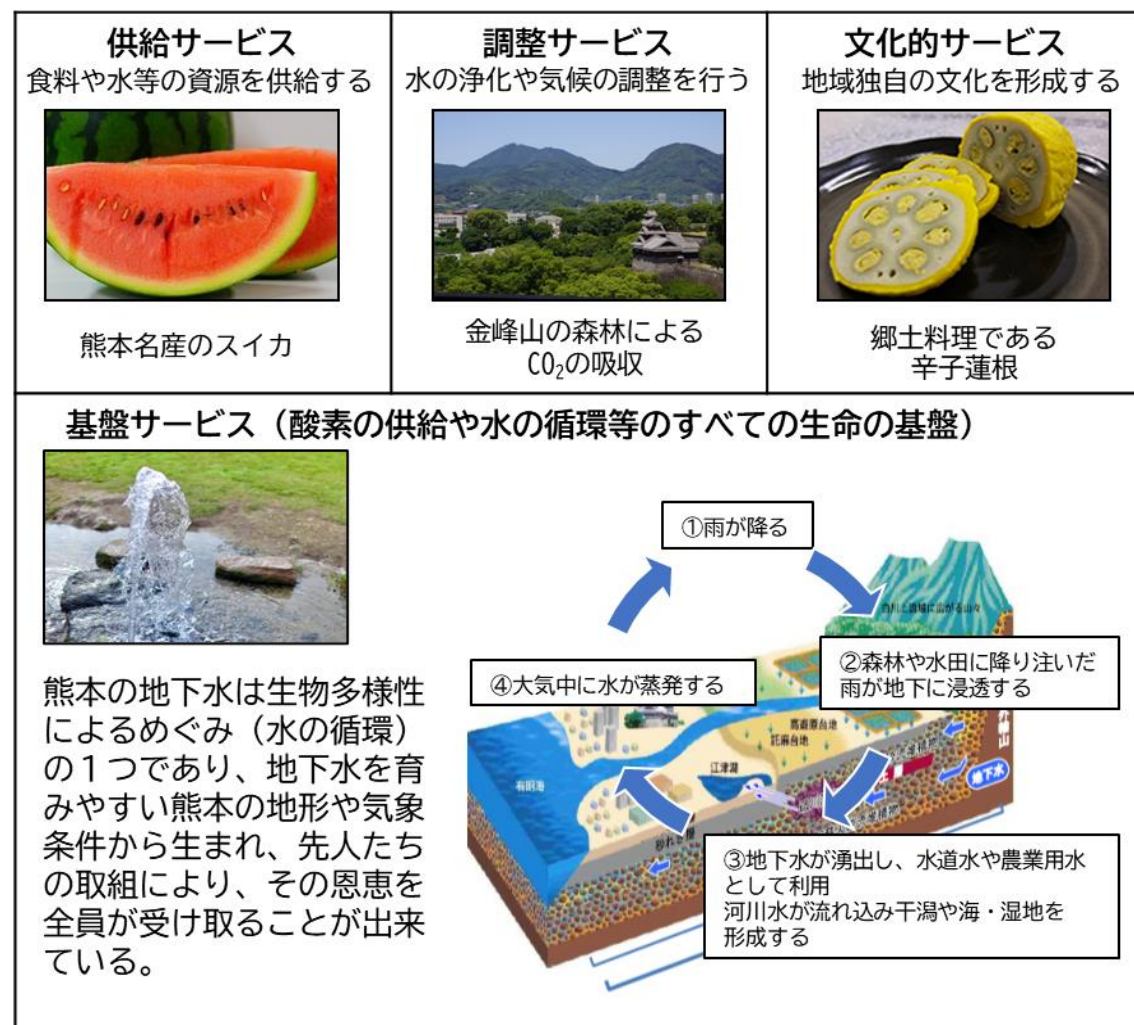
1 生物多様性とそのめぐみ

生物多様性とは、種・遺伝子・生態系の違いとそのつながりのことであり、地球に生きものが誕生して以降、40億年という長い年月をかけて進化してきた結果、今の暮らしがある。

生物多様性は、私たちの生活に欠かせない水や空気、食べ物の他、地域特有の文化や風土、気候の調整や自然災害の緩和等をもたらしている。



3つの多様性とそのつながりにより4つのめぐみが生まれる



2 生物多様性の危機

行き過ぎた開発など人の活動による危機	自然に対する働きかけの縮小危機	人から持ち込まれたものによる危機	地球環境の変化による危機
 生きものや生息域、生態系の減少 熊本県における絶滅のおそれがある野生動植物種の数 40種増 (2014→2019)	 放置竹林など自然の質の低下 遊休農地の面積 1,640,757㎡→1,687,063㎡ (2021→2022)	 生態系のバランスの乱れ アライグマの確認件数 3件→91件 (2017→2022)	 平均気温の上昇 熊本市の日平均気温 15.6℃→17.7℃ (1891→2022)

人間活動の影響により、地球上の種の絶滅はこの50年間で過去に類をみない速度で進んでおり、適切な対策を講じなければ、今後さらに加速するといわれている。

COP15において、「昆明・モンテリオール生物多様性枠組」が採択され、2030年世界目標「ネイチャーポジティブの実現」（生物多様性の損失を止め、自然を回復軌道に乗せる）が、掲げられた。

3 SDGsと生物多様性の関係

SDGsでは、17の目標を一番下で支える環境層、その上の社会層、その上の経済層と3つの層に分類し、これを「SDGsウェディングケーキモデル」と呼んでいる。



SDGsと環境・社会・経済との関係（ウェディングケーキモデル）
（出典：StockholmResilienceCentreWebサイト）

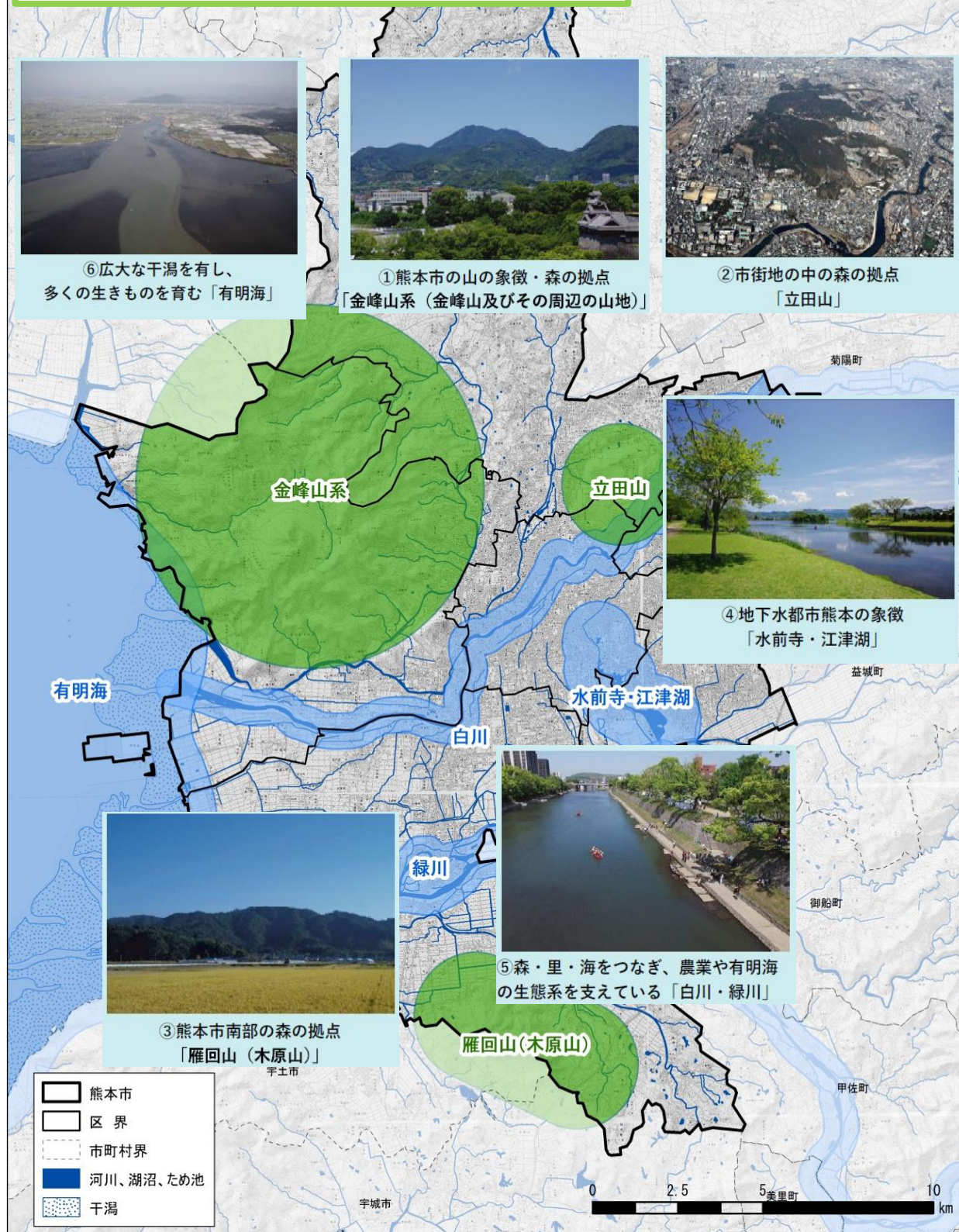
「経済」の発展は、生活や教育などの社会条件によって成り立ち、「社会」は最下層の「環境」層の自然環境によって支えられている
→生物多様性は、土台として私たちの暮らしを支えている

4 未来に残したい熊本市の自然環境

熊本市の恵まれた自然環境の中から、特に「生物多様性の保全上重要な場所（生きものの生息・生育地や生態系のつながりを保つ上で重要な場所）」、「古くから市民に親しまれ、大切にされている場所」という視点で、『みんなで未来に残したい熊本市の自然環境』6箇所を選出し、次世代に引き継いでいけるよう重点的に取り組んでいく。

みんなで未来に残したい熊本市の自然環境

金峰山系、立田山、雁回山
水前寺・江津湖、白川・緑川、有明海



①金峰山系

- ・カシ林など豊かな森林が守られ、人工林や竹林は適切に管理されている。また、豊かな湧水や山系から始まる川は、山麓部の田んぼを潤し、豊かな里の水辺の環境が地域の人達の手で守られている。
- ・市街地からも望める、豊かな自然が残る本市の山の象徴であり、石畳の道・霊巖洞等の歴史・文化的な資源や多様な環境が活かされ、登山のほか自然を楽しみ、学び、体験できる場として親しまれている。また「柿原迫谷」付近の里地では、市民活動団体による自然環境調査が実施されている。
- ・この豊かな自然を保全するため、森林管理の推進や、放置竹林対策の取組の拡大及び更なる環境教育の場としての活用を図っていく。

②立田山

- ・コジイ林など自然度の高い森林が守られており、豊かな湿地の環境が残され、立田山周辺の里地の市民活動団体による自然環境調査など人々の連携した取組で環境が維持・保全されている。
- ・市街地の近くにあって豊かな環境が守られていることで、多様な生きものの重要なすみかであるとともに、泰勝寺跡などの歴史・文化的な場所と一体となって、日常的な散歩やお花見などで自然に親しみ、また、野鳥・植物観察会などを通して、自然を体験・学習できる場となっている。
- ・この豊かな自然を保全するため、森林管理の推進や放置竹林対策の取組の拡大及び更なる環境教育の場としての活用を図っていく。

③雁回山（木原山）

- ・多様なシダ植物やムササビなどの動物がすむ自然豊かな森林が守られており、市民活動団体による植物等の自然環境に関する調査や研究が行われ、情報が蓄積されている。
- ・木原不動尊など信仰や歴史的な背景のある場所として活かされているとともに、身近なハイキングや野鳥・植物観察会などを通して、自然を体験・学習できる場として市民に親しまれている。
- ・この豊かな自然を保全するため、森林管理の推進や、放置竹林対策の取組及び更なる環境教育の場としての活用を図っていく。

④水前寺・江津湖

- ・地域住民や市民活動団体など様々な人々の連携した取組により、豊かで清れつな湧水や水辺の生態系が守られており、ヒラモなどの水草、水鳥、タナゴ類などの魚、水辺に集うホタルなど多様な生きものが見られる。
- ・本市の地下水の象徴として、その魅力が発信され、市の内外から多くの人が集い、熊本市の水の豊かさ、歴史・文化を実感し、水辺で休息したり遊ぶことのできる観光の拠点になっている。
- ・水前寺江津湖公園の外来種対策等の実施や絶滅危惧種の保全、周辺の緑豊かな景観の形成や既存の緑の魅力・価値を向上する取組を実施していく。

⑤白川・緑川

- ・生物多様性に配慮した河川管理によって、河川の連続性が確保され、周辺地域の森・川とつながり、様々な生きもののすみかが守られている。
- ・こうした川を通じたつながりが認識されるとともに、生きものの観察などの活動も広がる場となっている。また、市民活動団体による白川中流域の涵養活動や緑川河口でのヨシ焼きなど実施されている。
- ・自然環境に配慮した整備や、関係機関と連携した外来水草対策等に取り組む。

⑥有明海（干潟）

- ・4県にまたがる有明海は、自然の海岸と日本一広大な干潟が良好な状態で保全され、シオマネキ等のカニ類や、ムツゴロウなどのすみかとなっている。また、春や秋の渡りの時期には多くのシギ・チドリ類がやってくる環境が保たれており、活動団体による定期的な調査が実施されている。
- ・アサリやハマグリ等の水産資源を持続的に利用していくためにも、適切な資源管理を行い、保全に取り組む。

5 目的・対象期間

①熊本市生物多様性戦略の目的

この戦略は、2030年目標に掲げる「（仮）くまもとの魅力である清らかな地下水や、豊かな緑といった生物多様性のめぐみを持続可能なものとするために、損失を止め、回復軌道に乗せる（熊本市版ネイチャーポジティブ実現）」の実現のため、具体的な取組を体系化し、その取組を計画的に進めていく。

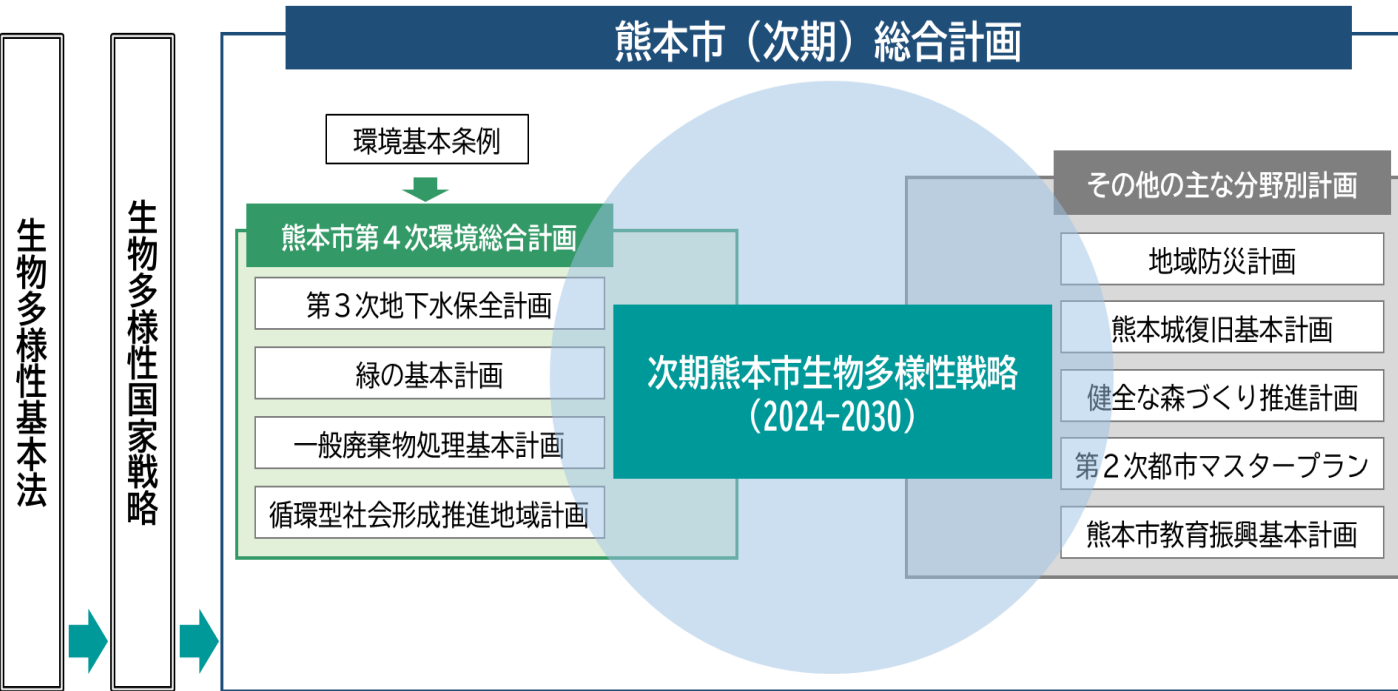
②対象期間

	計画名	～R1 (2019)	R2 (2020)	R3 (2021)	R4 (2022)	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	R8 (2026)	R9 (2027)	R10 (2028)	R11 (2029)	R12 (2030)	R13 (2031)
市	総合計画	第7次総合計画 (8年間)					次期(第8次)総合計画 (8年間)							
	熊本市 生物多様性戦略	現行戦略 (5年間)	現行戦略 (3年間延長)			次期戦略 (7年間)								
国	生物多様性 国家戦略	前戦略 (8年間)					現行戦略 (8年間)							
県	生物多様性 くまもと戦略	前戦略 (5年間)	前戦略 (2年間延長)						現行戦略 (8年間)					

計画期間は、2030年の世界目標である「ネイチャーポジティブの実現」に合わせ、2024年から2030年までとする。また、毎年行う検証及び総合計画の中間見直しに合わせ、戦略の見直しを検討し、総合計画との整合性を図っていく。

6 次期戦略の位置付け

生物多様性の保全は私たちの暮らしの基盤であることから、自然環境の分野にとどまらず、その他の様々な分野にも関係する戦略として位置付け、全庁的に取り組んでいく。

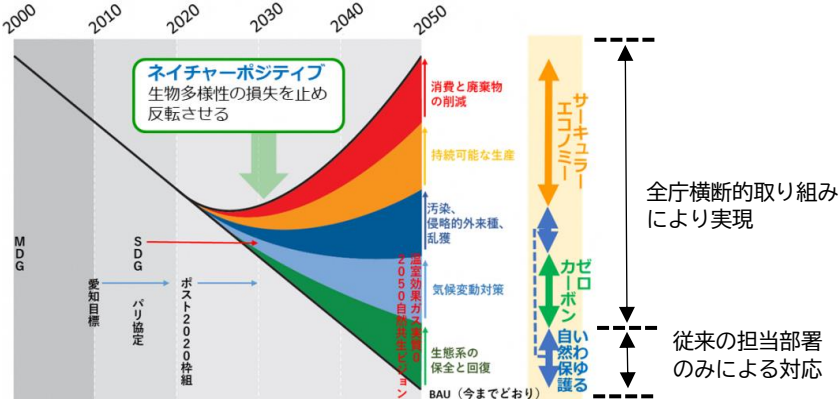


7 改定のポイント

①改定の背景

ネイチャーポジティブの実現

世界的に劣化した自然を回復軌道に乗せるために、生物多様性の損失を止め、反転させるための新たな目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択され、これを受け国家戦略も改定された。



出典：環境省次期生物多様性国家戦略地方説明会より

②戦略体系

第1章 目的・位置づけ等

- ・目的、対象期間（2024-2030）、対象地域

第2章 策定の背景

- ・生物多様性とは？
- ・生物多様性の危機 ・生物多様性のめぐみ
- ・生物多様性をめぐる世界・日本・熊本市の動き

第3章 熊本市の生物多様性の現状と課題

- ・自然環境の特徴
- ・生物多様性の特徴
- ・みんなで残したい熊本市の自然環境・各区の特徴
- ・課題

第4章 この戦略を通して目指す熊本市の姿

- ・基本理念、望ましい姿（2050年）
- ・短期目標（2030年）

第5章 望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画

- ・基本戦略、達成すべき目標、具体的な取組、各主体の基本的な役割

第6章 推進体制・進行管理

- ・推進体制、進行管理

ポイント1

新たな世界目標・国家戦略に対応
→生物多様性の保全には長期的な施策展開が求められるため、**5つの基本戦略を踏襲**した上で、生物多様性を取り巻く状況の変化に対応するため、**新たな動きや取組を戦略に組み込んでいく**。

ポイント2

全庁的に取り組む
→自然保護の部署に加え、関連する既存事業を戦略に取り入れることで、**全庁的に取り組む**。

ポイント3

わかりやすさの追求
→生物多様性のめぐみの1つであり、市民にも身近で関心の高い「**地下水**」の**取組を5つの基本戦略のリーディングプロジェクトとして位置付けることで、市民や事業者等にとって取組やすい、わかりやすいものとする**。

③基本戦略ごとの目標設定

状態目標 (あるべき姿)	行動目標 (なすべき行動)	施策(具体的な取組)	成果指標
地域の将来ビジョンである「 状態目標 」を設定	「 状態目標 」を実現するために必要な「 行動目標 」を設定	生物多様性に関連する既存事業を施策に取り込み、戦略ごとに状態目標、行動目標を数値的に表せる「 成果指標 」を設定することで、進捗や達成度を把握し、効果の検証や見直し(PDCA)に活かす。	

8 基本戦略

基本理念

自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、くまもとを、みんなで実現する

2050年の
望ましい姿

市民一人ひとりが関心を持ち、理解し、暮らしの中で生物多様性を上手に利用しながら守る行動をしている姿、市内に水や緑のつながりが身近な自然とともにかたちづくられ、豊かな生きものが息づき、人と人、人と自然がつながりあい、いきいきとした暮らしが営まれている

2030年目標

くまもとの魅力である清らかな地下水や、豊かな緑といった生物多様性のめぐみを持続可能なものとするために、損失を止め、回復軌道に乗せる（熊本市版ネイチャーポジティブ実現）

望ましい姿の実現に向けた基本戦略と状態・行動目標

基本戦略	基本戦略1 ～生物多様性を「知る」～	基本戦略2 ～生物多様性を「学び、つながる」～	基本戦略3 ～生物多様性を「守る」～	基本戦略4 ～生物多様性を「創る」～	基本戦略5 ～生物多様性を「活かす」～
リーディングプロジェクト	恵まれた地下水について知る	地下水について学ぶ機会を持つ	良質な地下水を保全する	豊富な地下水を育む	地下水の魅力を発信する
状態目標	①熊本市の恵まれた自然環境について知っている ②生物多様性について理解している	①生物多様性について正しく学ぶ環境が整っている ②生物多様性の保全の推進に向けた取組が、活動団体等と連携して実施されている	①生きものが十分に生息生育できる自然環境が保全されている ②地球温暖化が防止されている	①生きものの生息・生育地となる緑地が創出されている ②健全な生態系が回復している	①熊本市の地域特性を活かしたプレゼンスが強化されている ②生物多様性のめぐみが社会課題解決に活用されている（NbS）
行動目標	①熊本市の生態系や守るべき自然を把握する ②絶滅の危機にある種及び生息生育地を把握する ③ICTを活用した情報収集や分析を行う ④生物多様性について知る ⑤企業による生物多様性に関する情報開示を推進する	①持続可能な開発のための教育（ESD）を推進する ②生物多様性に配慮した商品やサービスについて普及啓発する ③持続可能な生産・消費にするため食品ロス削減の普及啓発をする ④連携基盤であるプラットフォームを活用する ⑤様々な主体と連携した取組を進める	①絶滅危惧種を保全する取組を実施する ②健全な生態系を保全する ③人と動物との適切な距離を保つ ④周辺環境に配慮した開発事業を推進する ⑤脱炭素化を推進する	①生態系に配慮した緑を創出する ②ESG債など民間資金を活用する ③在来種・希少種を増やす ④生態系や自然環境に配慮した整備を推進する	①地域特性を活かした魅力を発信する ②地域特性を活かしたまちづくりを推進する ③歴史や文化を活かした観光まちづくりを推進する ④バイオマスを活用する ⑤グリーンインフラやEco-DRR（生態系を活用した防災・減災）を推進する
成果指標 (2030年)	水や酸素、食料や地域特有の文化などが、生物多様性からもたらされたものと知っている人の割合 30%	生物多様性について学んだことがある人の割合 100%	緑被率（維持） 32.80% 温室効果ガス削減量（2030年到達） 65%	江津湖の外来魚割合（維持） 3.5% 健全な生態系を回復させるための「自然共生サイト※」への申請件数 6件	生物多様性のめぐみである「地下水」の国内外への魅力発信件数

※「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を国が認定する区域のこと

9 基本戦略ごとの各施策（具体的な取組）

基本戦略		状態目標	施策（具体的な取組）	
リーディングプロジェクト	1 生物多様性を「知る」	恵まれた地下水について知る	出前講座や節水市民運動の実施、くまもと水検定の実施や副読本を活用した教育	
		①熊本市の恵まれた自然環境について知っている ②生物多様性について理解している	・出前講座などの普及啓発の実施 ・絶滅危惧種や希少種調査の実施 ・指標種モニタリングの実施 ・ICTを活用した調査報告システムの実施 ・生きものデータベースの構築 ・出前講座などの普及啓発の実施 ・企業による生物多様性に関する情報開示の推進（TNFD）	環境政策課、動植物園、環境総合センター、熊本博物館 他 環境政策課 環境政策課 環境政策課 環境政策課 環境政策課、動植物園、環境総合センター、熊本博物館 他 環境政策課
リーディングプロジェクト	2 生物多様性を「学び、つながる」	地下水について学ぶ機会を持つ	田んぼハイスクールによる学習機会の創出、水源地見学などの実施	
		①生物多様性について正しく学ぶ環境が整っている ②生物多様性の保全の推進に向けた取組が、活動団体等と連携して実施されている。	・自然観察会、体験学習等の実施 ・食育の実施 ・ESD人材の育成 ・ワンウェイプラスチック削減・バイオプラスチック等利用促進事業の実施 ・「もったいない！食べ残しゼロ運動」の推進 ・「買すぎない、作りすぎない、食べ残さない」など、食べ物を大切にすることの啓発 ・いきもんネットを活用した連携・協働の取組実施 ・市民、活動団体、学校、企業などとの新たな連携体制づくり ・市民活動団体と連携したイベントの実施	動植物園、環境総合センター、花とみどり協働課、教育委員会 健康づくり推進課 環境政策課、教育委員会 廃棄物計画課 事業ごみ対策課 健康づくり推進課 環境政策課 環境政策課 環境政策課
リーディングプロジェクト	3 生物多様性を「守る」	良質な地下水を保全する	地下水質の常時監視、硝酸性窒素対策	
		①生きものが十分に生息生育できる自然環境が保全されている ②地球温暖化が防止されている	・絶滅危惧種の生息域外保全の実施 ・特定外来生物の駆除 ・緑地・森林の保全 ・街路樹再生整備の推進 ・野生鳥獣による農水産物被害及び生活被害の防止 ・愛玩動物の適正飼養の推進 ・環境影響評価制度を構築し、周辺環境に配慮した開発事業の促進 ・再生可能エネルギーの利用及び省エネルギーの推進 ・公共交通や自転車の利用促進 ・市電緑のじゅうたんの維持管理	動植物園 環境政策課、各区土木センター みどり政策課、都市政策課 みどり政策課、東区土木センター 農業支援課 動物愛護センター 環境政策課 脱炭素戦略課、道路保全課 交通企画課、自転車利用推進課 みどり公園課

基本戦略		状態目標	施策（具体的な取組）	
リーディングプロジェクト	4 生物多様性を「創る」	豊富な地下水を育む	水源かん養（水田湛水、かん養林の整備・保全）の実施、有効率向上のための上水道管の整備	
		①生きものの生息・生育地となる緑地が創出されている ②健全な生態系が回復している	・つながりの森補助金による緑化支援 ・放置竹林対策・耕作放棄地対策への活動支援 ・OECMの推進 ・ESG債の促進（グリーンボンド） ・「スポンサー花壇」の整備・運営による緑地空間の確保 ・ふるさとの森基金の活用（環境保護地区） ・希少種に配慮した下草刈りや移植 ・（再掲）特定外来生物の駆除 ・環境保全型農業の推進 ・生態系や自然環境に配慮した水路整備 ・生態系や自然環境に配慮した河川改修（多自然川づくり）	花とみどり協働課 みどり政策課、花とみどり協働課、農業委員会事務局 環境政策課 環境政策課 みどり政策課、花とみどり協働課、 みどり政策課 みどり公園課、東区土木センター 環境政策課、各区土木センター 農業支援課 農地整備課 河川課
リーディングプロジェクト	5 生物多様性を「活かす」	地下水の魅力を発信する	熊本の地下水の国内外への魅力発信、若い世代による地下水の魅力発信	
		①熊本市の地域特性を活かしたプレゼンスが強化されている ②生物多様性のめぐみが社会課題解決に活用されている（NbS）	・豊富な地下水や農水産物を通した国内外への魅力発信 ・温泉や竹林などの地域資源を活用したまちづくり ・地域特性を活用した観光振興 ・熊本城や地域のお祭りといった歴史と文化の継承 ・環境工場でのバイオマス発電や熱エネルギーの活用 ・街路樹植栽スペースの雨水貯留機能の活用 ・土砂災害防備林の整備	水保全課、国際課、農業政策課 観光政策課 観光政策課 文化政策課、熊本城総合事務所 環境施設課 みどり公園課 みどり公園課